*Tsukuba Psychological Research*
2009, **37**, 19-29



# 心理研究の方法としての読書：テクスト言説分析の提案

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　臼井　　東
筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　茂呂　雄二

Textual Discourse Analysis: An interpretive method for understanding psychological process through reading practice

Azuma Usui (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Yuji Moro (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

To date, a number of studies have sought to elucidate the mental processes involved in textual analysis. However, because the methods in those studies have reflected researcher intuitions, they have tended to lack clear theoretical frameworks to connect textual interpretation and its mental processes. Accordingly, it is especially urgent to develop a coherent method of discourse analysis based on dialogical theory which supports its theoretical validity and its methodological generalization.

This paper proposes a textual analysis procedure called textual discursive analysis, which is based on M. Foucault's theory of discourse. Textual discursive analysis is conducted through two steps.

(1) Extract discursemes (units of textual meaning) from the text, and arranging them in the form of a binomial opposition, conduct content analysis.

(2) Specify the arrangement and distribution of discursemes within the discursive space.

Through these steps, textual discursive analysis can identify the formation and organization of the author's sense-makings, social background meanings, and their interrelationships.

We apply this method to moral discourse within the context of the recent psychological controversies over moral education. Providing graphical representations of the discursive space for the moral education controversies, the analysis results indicate that the method has a degree of validity and demonstrate its applicability.

**Key words:** textual discourse analysis, discourse, discursemes, discursive space

## はじめに

本論では，テクスト言説分析（textual discursive analysis）と名付ける，心理研究のための読書の方法論を提案をすることを目指す。従来，読書の過程は心理研究の対象として扱われてきたが，そればかりでなく心理過程研究の方法論とみなすこともできる。

読解過程を通して知識の獲得過程を明らかにする（秋田，1997），文字の読み書きの習得過程に関するデータから子どもの文化的発達過程を論じる（無藤，1986），読書時の眼球運動の分析から人間の情報処理過程を明らかにする（御領，1987）など，読書に関連する様々な行動データが，人間心理や認知

過程解明の基礎資料として扱われ多くの成果を上げてきた。これは「心理研究のための読書行動の分析」と呼ぶことができよう。この場合，読書は行動指標とみなされ，人間の認知あるいは学習過程を検証するための素材として扱われるから，どちらかといえば二次的位置づけを与えられていることになる。

これとは逆に「テクスト読解を通した心理研究の方法」とでもいうべき方向性も想定できよう。書かれたテクストは何らかの意味で人間の心理，認知に関する情報を含んでいるから，テクストの読解は心理理解につながると想定できる。まず文学作品は書き手の心情が現れるだろうし，ときには読者の心理的傾向をかたどり作る場合もある。あるいは語彙選定のように読者の発達段階に応じてテクストの難度を変えるなど，読者の心理発達に関する想定が含まれる。さらには，時として歴史的な文書に現在のモラルとは相反する当時の常識が見られるように，そのテクストが書かれた当時の心性に関する情報を得ることもできる。

ところで話しことばの解釈を通して，心理研究の方法論とする試みは，会話分析（上野，2001），談話分析（茂呂，1997），語りの分析（やまだ，2000）など，さまざまな提案がなされている。これに対して書かれたテクストをデータにして心理過程を読み解く方法も，多いとは言えないがいくつかの心理研究の領域ですでに利用されている。

たとえば「病跡学」（福島・高橋，2000）がある。これは精神分析派の深層心理に関する理論を解釈の枠組みにして，作家の心理，特に病理的な心理あるいは気質と関係づけて論じるものである。創作と想像力の背景が議論されたり，個別の作品の意味が病的心理に関連づけられて解釈される。

また子育ての歴史文書を読み解くことを通して，過去の子育てと現在のそれを比較する，文化心理学的な試みもある。小嶋（2001）は，『柏崎桑名日記』と呼ばれる，江戸期の武士階級の家族によって記された手紙記録から，当時の親の養育態度や家族観を抽出することを通して，現在の子育て文化を相対化する試みを行なっている。小嶋の試みは，発達心理に関わる歴史的情報を抽出することで，現在流通する育児に関する考え方を相対化しようとする試みだといえる。

一方，浜田（2001）は，多数の冤罪事件の弁護に携わった経験から，供述分析を提案している。供述分析とは，供述調書を読み込み，調書に現れる「無知の暴露」を抽出することで，被疑者と警察官・検察官の間でおこなわれたやりとりの偏りをあぶり出そうとする方法である。日本の犯罪取り調べ過程は，諸外国のようには録音・録画が許されず，取調官によって作成される供述過程の文書が唯一の記録となる。そのために警察・検察側のいわば善意にもとづく犯罪解明への熱意が，しばしば冤罪を引き起こし，それが冤罪であることの認定に数十年を要する場合も少なくない。浜田の供述分析は，テクストに残る矛盾やリアリティーの欠如等から，被疑者が犯罪の現場にいなかった故に生じる無知の痕跡を再現しようとする方法である。

いまひとつ注目されるのは，生田（1986）の芸談の分析である。生田は，舞踊等の伝統芸能のエキスパートが書いたテクストをもとに，その人の熟達化プロセスを再現したり，隠喩の使用等の熟達化を助ける言語化を分類している。

以上のように，既に多くの研究が，書かれたテクストを素材にして，そこから何らかの心理過程を再構成する，あるいはその時代のエートスとでもいうべき時代の背景心理等を特定することを試みている。

しかしながら，従来の方法は，それぞれの研究者の直観に任されたもので，テクストと心理過程を結び付ける理論枠組みも不十分であり，方法の改善が必要である。特にテクストが成立する背景から分析方法に至る一貫した理論の整備と，方法の一般性と適用可能性に関する議論が必要に思える。そこで本論では，テクスト言説分析（Textual Discursive Analysis）と名付ける，心理研究のための方法論を提案することを目的にする。まず，最近の学習に関する研究領域などを取り上げながら，テクスト言説分析が必要となる方法論上の背景を明らかにする。次にテクスト言説分析に必要な基礎的概念を整理して，提案する概念の明確化をはかる。最後に，手続き化された分析方法を提案し，具体的な分析事例に適用して，評価を試みる。この一連の作業は，読書を通した文化的歴史的心理の再構成の作業であるから，その意味で一つの読解のモデルを提案することにもなり，読書研究の新しい視点の提供にもつながるといえる。

## 言説の構造

学習発達研究の領域では，言説実践に対する関心が高まっているものの，Daniels（2006）が指摘するように，言説構造に関する理論的検討が不足している。ここでは，テクスト言説分析の前提となる言説と，これに関連する概念を整理しておく。言説は英語にすればdiscourseであるが，同時に談話も英語にすれば同じ語になる。しかしテクスト言説分析

では言説と談話を区別したうえで，後者の談話を最も広い概念として扱うこととする。談話は，日常に広く行なわれることばの実践と規定される（茂呂，1997）。談話には，次のような日常言語実践の下位カテゴリーが包含される。それは，テクスト，会話と対話，言説，発話・語り・ナラティブ，そして間テクスト性と談話実践のレパートリーである。これらの下位カテゴリーのうち，本論でいうテクストとは，談話のうち，書かれたものを指すこととする。テクスト言説分析が主に想定しているのは，元々は口頭で語られた資料の文字化テクストである。たとえば，学習環境を変えた場合に感じられる学習に関する違和感の語りであったり，どのようにして学習目標や学習環境の整備に心がけるかに関する，教師へのインタビューデータである。

このような日常言語実践一般を指す談話に比べて，本研究が焦点を当てる言説とはフーコー（1981）に由来する概念であり，私たちが日常行為について疑問をもつことなく当然のように思わせる談話実践及びその実践を可能にする装置を指す。フーコーは『知の考古学』（1981）において，言表・言説・アルシーヴという3つの概念を提唱した。言表とはその時代ごとのひとつひとつの言語表現であり，それらが編成されたものが言説である。そしてある言説に働く規則がアルシーヴである。本研究で主に扱うのはこの3つの概念の中の言説についてであるが，フーコー（2006）によれば言説とは，「じっさいに述べられた言語的まとまりのみからなる，つねに有限で，現働的に限定された集合である」（p. 161）という。つまりフーコーにとって言説とは，何通りもの組み合わせがあったはずの言表が，ある諸条件によってひとつのまとまりとして集合したものである。ゆえにそうした性質を持つ言説を分析することは，「言説の存在の諸条件を決定し，最も的確にその限界を定め，言表が結びついている他の諸言表との相関関係を確定し，他のどのような言表行為の形式をそれが排除するものであるか」を問うことである（フーコー，2006，p. 162）。ここで重要なのは，言説分析は単にある言説が出現した諸条件を特定することを目指すのではなく，なぜその言説がそれ以外ではありえなかったかを考察することを目指している点であり，そこが言説分析の重要な特徴のひとつである。

またフーコーが，本研究が提案するテクスト言説分析にとって有効な示唆をしていると思われるのは，言説の編成や統一性について考察を行っている点である。ここで言う編成や統一性とは，諸々の言表の同一性ではなく，逆にそれらの分散のことである。つまりフーコーは言説を空間的に捉える視座を提供するのである。こうした言表の分散空間をフーコー（2006）は「座標系」（p. 174）と呼んだ（フーコー，2006）。よってある言表の集合の中から特定された座標空間が言説であると言える。本研究が提唱するテクスト言説分析では，テクストからこの言説の空間を特定する。

### 言説の機能

また言説は，ある種の意味作用であると言え，同時に意味作用を支えるさまざまな物理的制度的装置としての機能を持っている。たとえばピアジェの保存課題は，保存概念の発達を量るテストだとするテスト言説が流通している。このテスト言説は当然視され，心理学における常識となっている。しかし現実には，テストとは何かを理解できない就学前の幼児もいるために，この課題の意味は，誰にとっても同じ意味を持つような普遍的な実践とは言えず，特殊な意味作用だといえる（佐伯，2001；塚野，2001）。にもかかわらず，標準化されたテスト手続きや評価方法，あるいは過去の研究成果等が，この課題がテストであることを維持し強化する装置として整備され，容易にはテスト言説を覆せないのである。それゆえ言説に着目することは，今現在流通している言説のあり方を特定し批判することを可能にする。フーコー（1981）はこうした言説の特定と批判を「宙づり（p. 38）」と呼んだ。しかし前述したようにフーコーは言説の構造については理論を構築したものの，具体的な分析手法については十分に述べなかった。そこで次にフーコーの言説に関するアイデアを拡張したGeeとLemkeを紹介し，彼らがどのように具体的にフーコーのアイデアを拡張したかを示し，その限界についても述べたい。

### Geeによる言説分析

まずGee（1999）は，大文字のディスコース（Discourse）と小文字のディスコース（discourse）との区別を導入して，言説と談話一般を対比させている。Geeによれば，小文字のディスコース（discourse）とは私たちが実際に語るものであり前述した談話一般を意味するのに対し，大文字のディスコース（Discourse）とはこうした小文字のディスコースを形成する価値観や視点といったような社会的慣習であるとされ，これは前述した言説に当たると言える。Gee（1990）は言説の特徴について，①発話や行為の拠り所となる価値観や視点を内包しており，②内部批判や自己吟味に対して抵抗力を持ち，③社会的権力の配分や階層構造と密接に関わっ

ているという3点をあげている（當眞，1997）。Geeはこうした区別を設けたうえで，大文字のディスコース，つまり言説に焦点を当てて分析を行っている。たとえばGee（1999）は，医薬品であるアスピリンのビンに書かれている注意書きを言説分析し，このテクストには「誰が－何を－しているwho-doing-what」という観点から，「裁判対策の法律家の声」と「公式的な注意の声」の二つの声があること，つまりヘテログロシック（異種混交的）であることを読み解いている（Table 1）。一つ目の声である「裁判対策の法律家の声」は，Table 1でイタリック体と大文字で書かれた部分である。この部分は，“children and teenagers”や“last 3 months”など，かなり具体的な言及がなされており，重大さが強調されているのが特徴である。一方，二つ目の「公式的な注意の声」は，中央部分の普通の字体で書かれている部分である。ここでは，“any drugs”という一般的な単語が表れたり，“doctor”が“health professional”になっていたりするなど，注意がより一般的に言及されており，重大さがそれほど執拗に言及されていないことがわかる。Geeは二つの声が存在しているこの注意書きは，会社の歴史を反映していると指摘している。つまり一つ目の声である「裁判対策の法律家の声」は，以前この会社が薬害問題で訴えられたため，そうしたものに備えるために付け加えられたものであるとしている。Geeはこのように，テクストは歴史的であり，その中には二つ以上の声，つまり言語を通して「誰が－何を－しているwho-doing-what」に関する複数の意味が差し込まれており，それらは切り離せないものであると指摘している。

Geeの方法は，大文字のディスコースを参照しつつも，主たる焦点を小文字のディスコースに宛て，その抽出に重きが置かれているように思われる。しかしGeeの言説分析の困難としては，手続き化の明確さを取り上げることができる。Gee（1999）自身も，言説分析を行う際に従うべき“固定したlock step（p. 119）”手法を提案したくないとしているように，手法の手続き化という問題についてはきわめて慎重な立場がとられているために，残念ながら他の分析者が追随可能な手続きが読み取りにくくなっている。本論ではこうしたGeeの言説分析の特徴を踏まえた上で，言説分析の方法論の手続き化を目指す。

### Lemkeによる言説分析

Lemkeは，フーコー（1981）が言表間の関係づけのルールである言説編成（discursive formation）を提案することで個人の嗜好性の変化ではなく，社会実践とコミュニティのダイナミックな変化に焦点を当てている点を評価し，フーコーのアイデアを具体的に拡張する事を試みた。

Lemke（1995）は，異なった社会的・政治的視点が言説を編成するということを示すために，「同性愛」という言説について，同性愛を罪深いものと見なすキリスト教原理主義者によるテクスト（Table 2）と，ゲイを批判しているキリスト教原理主義はアメリカにおける政教分離の原則に反していると主張するゲイ活動家のテクスト（Table 3）を並べて分析することで，この2つのテクストが同性愛とゲイというテーマについて，どのような立場から，どのような意味づけを行っているのかを明らかにして

Table 1　アスピリンのビンの注意書き

Warnings: *Children and teenagers should not use this medication for chicken pox or flu symptoms before a doctor is consulted about Reye Syndrome, a rare but serious illness reported to be associated with aspirin.* Keep this and all drugs out of the reach of children. In case of accidental overdose, seek professional assistance or contact a poison control center immediately. As with any drug, if you are pregnant or nursing a baby, seek the advice of a health professional before using this product. IT IS ESPECIALLY IMPORTANT NOT TO USE ASPIRIN DURING THE LAST 3 MONTHS OF PREGNANCY UNLESS SPECIFICALLY DIRECTED TO DO SO BY A DOCTOR BECAUSE IT MAY CAUSE PROBLEMS IN THE UNBORN CHILD OR COMPLICATIONS DURING DELIVERY. See carton for arthritis use and Important Notice.

（和訳）

注意書き：*アスピリンと稀ではあるが深刻な関係があるとされているライ症候群に関して医師から診察を受ける前に，水疱瘡やインフルエンザのために児童ならびにティーンエージャーたちがこの薬を服用すべきではない。*この薬と他の全ての薬は児童の手の届かない場所に置くように。予期せずに大量服用してしまった場合は，直ちに有毒物コントロールセンターに相談するか，専門家に助言を求めること。あらゆる薬と同じように，もしあなたが妊娠中もしくは育児中であれば，この薬を服用する前に健康専門家にアドバイスを求めること。***出産中に合併症や胎児に問題を起こすかもしれないので，医者から特に指示が無い限りは，過去3ヶ月の間にアスピリンを服用しないことが特に重要である。***箱にある関節炎の使用と重要な注意点を見ること。

いる。Lemkeはここで，フレーズごとにテクストを区切って時間進行とともにテクストを展開し，意味がどのように生成されるのかをみるダイナミック・リーディング（dynamic reading）という手法を採用している（p. 45）。まず同性愛を罪深いものと見なすキリスト教原理主義者によるテクストの言説分析から紹介する。ここでは［1A］から［1Ab］までの間に関して紹介するが，まず［1Aa］はsuggestにより否定的評価が強められており，次の［1B］は/HOMOSEXUALITY/と/SICKNESS/という2つの同一関係を構築している。［1Ca］も［1B］と同様に同性愛と身体的状態の同一関係を構成している。ここでLemkeは間テクスト的主題編成（ITF：intertextual thematic formation）と名づけた/HOMOSEXUALITY-Tok/-/Val-［PHYSICAL CONDITION］/というような形式的表現を用いている。TokとはTokenであり，代表するものを表しているのに対して，ValとはValueであり価値づけを表している。つまりこの表現からは，主題が同性愛であり，書き手がこれを身体的な状態であると価値づ

Table 2　'道徳的マジョリティ'の言説（The Discourse of the 'Moral Majority'）

| | | | |
|---|---|---|---|
| | To suggest | | 1Aa |
| that | homosexuality is a sickness | | 1B |
| or that | it | is a physical condition | 1Ca |
| | | caused by biological facts | 1Cb |
| rather than | an emotional and mental condition | | 1D |
| | is highly blasphemous. | | 1Ab |
| | The Bible tells us | | 2A |
| that | the cause of homosexuality is sin. | | 2B |
| | A person is not born a homosecual; | | 3A |
| | he becomes one accoring to his sinful will. | | 3B |
| | a person lets sin and the devil take control of his life. | | 4 |

Table 3　ゲイの人権の言説（The Discourse of Gay Rights）

| | | |
|---|---|---|
| | In 1984 the only remaining serious objection to homosextuality is religious. | 4A |
| | Scientific observation and modern statistical surveying show | 4Ba |
| that | homosexuality is a normal variation of sexual behavior in human beings | 4Bb |
| | ...(SCIENTIFIC OBSERVATION) has changed the way the modern world view sex. | 4C |
| | We look scientifically. | 4D |
| | We no longer look to ancient 'revealed' texts | 4Ea |
| | to find facts about the world. | 4Eb |
| | We look to the world... | 4F |
| | With that shift in methodology, | 5Aa |
| | Old superstitions have been debunked... | 5Ab |
| | Thanks to (SCIENTIFIC OBSERVATION) | 5Ba |
| | it can be shown | 5Bb |
| that | homosexuals are not incarnated demons or withes, | 5Bc1 |
| | not criminals or spies... | 5Bc2 |
| | Today homosexuality is understood to be a psychological condition, | 6Aa |
| | a quirk of pwersonality | 6Ab |
| | a simple personal characteristic. | 6Ac |
| | There is no evidence | 6Ba |
| that | active homosexuals are mentally disordered or socially dysfunctional. | 6Bb |
| | Certain religious groups, however, demand, | 7Aa |
| | in spite fo the evidence, | 7Ab |
| that | this particular trait be singled out for special condemnation and blame. | 7Ac |

けている事が見てとれるのである。

そして［1D］で/PHYSICAL-BIOLOGICAL/と/EMOTIONAL-MENTAL/という主題対比がなされ，［1Ab］で‘is highly blasphemous’ということで先延ばしにされていた評価態度が明確にされる。ここまで，/HOMOSEXUALITY-Tok/Val-[PHYSICAL-BIOLOGICAL-CONDITION]という主題と，/HOMOSEXUALITY-Tok/Val-[MENTAL-EMOTIONAL CONDITION]という主題の，異なる2つの主題が対比させられており，そこに“blasphemous（冒涜）”という最も重要な新情報がもたらされ，この二つの主題の対比を効果的にしている。つまりこのテクストでは，2つのITFが構成され，それを道徳的見地から非難するかどうかで同性愛に対する説明が構成されている。

次にゲイ活動家のテクストについてであるが，一見するとここでは［4A］の“宗教的religious”ITFと［4Ba］の“科学的scientific”ITFのふたつのITFが対比されているように見えるが，これらは実際には直接的に対比されてはおらず，“科学的scientific”と“迷信superstitions”という二つの評価スタンスによって対比されている。ここからLemkeは分析に当たっては，より広範な社会システムをリソースとして活用する必要性を指摘している。よってテクストの意味は，より広い文脈に頼っているといえる。Lemkeはこのようにテクストと言説の意味が社会的なものであることを特に強調している。

しかしこうしたLemkeによる言説分析はテクストの意味をより広い文脈から捉え，様々な声を取り出そうとする点は，本研究と目的を同じくするものの，言説空間を再現する手続きのさらなる具体化が必要であるように思われる。

そこで本論で提唱するテクスト言説分析では，GeeおよびLemkeのアイデアを生かしつつ，言説分析の手続きのさらなる具体化を目的としたい。

## テクスト言説分析の方法

### 一般手順

テクスト言説分析とは，一般的に述べれば，以下の手順からなる分析手法である。まず資料体となるテクストをサンプリングしたうえで，①「言説素(discurseme)」とよばれる単位情報を抽出し（言説素の抽出），それを2項対立の形に配置して内容分析し，②「言説空間（酒井，2002)」と呼ぶ言説素の配置と分散を特定すること（言説空間の再現），という2つのステップを通して，問題とする心理過程に関する考察を加えるものである。ステップ1で抽出される言説素とは，テクスト言説分析において最も基本的な分析単位となるものであり，命題（茂呂，1981）あるいはテクストの意味構成要素である。テクスト言説分析では，この言説素が，基本的に対立概念となると仮定する。またテクスト言説分析では，対立する言説素同士が形成する関係性を，酒井（1996）にならって，「(経済）配分＝エコノミー」と呼ぶことにする。エコノミーとは家政学の謂いであり，一定の財を家族生活の何に配分するかを意味する。テクストを構成する過程もまた，対立項の形で重要事項を取り立て，さらにそのうちのどちらに重きを置くかの配分を実践する過程と見ることができる。

言説素の抽出は，テクストの内容面の抽出と縮約の作業である。これは，従来のKJ法（川喜田，1967）やグラウンデッドセオリー（木下，2003）などにおける，アイデアや概念の抽出過程とほぼ同じであるといえる。

次にステップ②の作業は，言説空間の再現である。言説空間とは「制度的な約束事に支配された意識の働く場（酒井，2002，p. 6）」のことであり，特定のテクストが言説素同士の関係性とその配置から構成される空間のことである。この空間には明示されているものはもちろんのこと，明示されてはいないが，言説素同士の関係性とその配置からあぶりだされる前提も表示される。このように言説空間の再現とは，テクストに織り込まれている様々な言説を抽出するために，言説素の配置と分布から空間的な表示を試みることを意味している。

以下の分析方法の紹介においては，分析の事例として，道徳性に関するテクストを取り上げる。道徳性は，従来の心理学では，子どもの個人特性としてのみ扱われてきたが，本論ではTappan（2006）等に従って，言説実践として扱ってみる。道徳は，ある種の言説実践であり，道徳的言説内容を一定の配置に配分することを通して，特定の道徳的な視点や立場を他の人びとに了解可能にすることができる，一種の言語実践だとする立場に立つのである。

### 分析対象

ここで分析対象とするテクストは，Y市M小学校で収集された文書類および道徳教育に関するテクストと，道徳用教材として作成された『心のノート』について書かれているテクストである。小学校で収集された文書類には道徳教育と道徳の授業に関する資料もあれば，通常の学級通信も含まれている。匿名性の確保ために，一部を変えている場合がある。

### テクスト言説分析のプロセス

一般手順でも述べたが，テクスト言説分析は，①言説素の抽出と配置，②言説空間の再現という２つのステップで進められる。以下にそれぞれのステップを具体的な事例を用いて示す。

### ステップ１．言説素の抽出と配置

次に紹介する事例１では，まず言説素を抽出してみる。

**事例１　「みんなちがって，だからおもしろい」（学級通信５年生　2006年９月25日号）**

この事例は，学級通信のタイトルである（Table 4）。このタイトルからは，①【みんながちがう】，②【おもしろい】，③【①だから②である】，という３種類の言説素を抽出することができる。通常，学級には，クラスのメンバーの平等性が強調される。言説素①は，【①＊みんなおなじ】という対立する言説素を前提にして成立するといえる。つまりある言説素は，対立する２概念（命題）と，２つのうちの他方の言説素を前提にして成立している。さらに重要なのは，その対立する言説素を当然の背景として，一種の問題として定式化されているということである。

事例１では，①【みんながちがう】と【①＊みんなおなじ】，の２種類の言説素が構成するエコノミーを背景にして，あえて①を卓立させていると読むことができる。通常の学級経営の常識からは，ある種の平等主義が前提となるが，平等主義を当然の考えとしつつも，そこにあえて差異性を卓立させている。

フーコーは，このような当然視を生み出す過程を実定性と呼ぶ。「実定性」の産出とは，「目につかない前提を導入し，それらの前提があたかも自然な条件であるかのようにする」ものであり，「いわば「常識」として共有され，あまりにも当然視されているために誰もあえて問おうとしないにもかかわらず，それ無しには単に合意だけでなく論争や対立さえ不可能になってしまうような言説における構成体」（酒井，1996，pp. 129-130）である。さらにフーコー（2002）は，言説がもたらす，当然の前提のなかで，生み出される差異性を，問題系と呼んでいる。フーコーは「思想史」と「思考の歴史」を区別する。思想史が特定の概念登場と新しい言葉の登場を判定するのに対して，「思考の歴史」が，制度，実践，習慣，行動などが，人々にどのような〈問題〉として現れるかを分析する，としている。このようにテクスト言説分析における，言説のエコノミーの特定は，このフーコーの言う問題系の特定の作業だということができる。心理学的な語り研究では，ワーチ（2002）が語りに含まれる複数の異なる視点を多声性と呼んで，それが手段の対立で構成されるとしている。例えば，米国の歴史に関する語りでいえば，市民の平等という歴史表象と，それとは矛盾する先住民の排除の歴史である。大学生の米国の歴史語りは，この対立する物語を手段として構成されるという。また Abreu（1995）は，学習過程における価値づけ（varolization）の問題を論じているが，これもテクスト言説分析における言説のエコノミーの特定と重なる作業手順だといえる。

### ステップ２．言説空間の再現

**事例２　第二の故郷（ふるさと）Ｋニュータウン**

事例２は小学校における道徳の授業の教材である（Table 5）。事例２の言説素を抽出し整理するとTable 6のようになり，そこからさらに言説空間を再現すると，Fig. 1のようになる。ここでは，「代々土地を受け継いだ農家」という言説素の対立項として，テクストに明示されていない「新しく移り住んだ人びと」が抽出されたことで，Ｏさんがこれまで代々土地を受け継いだ農家であるという事実が卓立させられている。そこから，ニュータウン計画をめぐるＯさんの葛藤は，自分が代々土地を受け継いできた農家であるというアイデンティティから生じている事を読み取ることができる。このアイデンティティによって，Ｏさんは土地を手放し，計画に賛成することに「悲しみ」を感じるが，同時にこのアイデンティティによって，計画に賛成し土地を手放したとしても，自分は代々土地を受け継いできた農家として，新しく移り住んでくる人びとともに整然と美しい町をつくることに「誇り」を見出しているということを，読み取ることができる。

## テクスト言説分析による実際の分析

**事例３　「『心のノート』作成の経緯」**

事例３では，これまで紹介したテクスト言説分析の手法を用いて，実際に分析を行う。この事例では，『心理学ワールド』（日本心理学会，2006）の第

Table 4　事例１「みんなちがって、だからおもしろい」（学級通信５年生　2006年９月25日号）

| みんなちがって，だからおもしろい |
|---|

32号で特集された心のノートに関するテクストをとりあげる。分析を行うテクストは，臨床心理学者の河合隼雄による「『心のノート』作成の経緯」(Table 7）である。2002年に小中学校の道徳用教材として各学校に配布されて以降，『心のノート』をめぐっては推進派と批判派が様々なメディアで論戦を繰り広げている。そのメディアには当然テクストも含まれる。そこで事例3では，テクスト言説分析の手法を用いる事によって，心のノート賛成派である河合によるテクストが，どのような言説空間を構築しているのかを明らかにする。まずこのテクストからは7つの言説素とそれに対応する対立項が抽出された（Table 8）。そしてFig. 2のように言説空間が再現された。また事例3では，対立項についても言説空間において図示した。この言説空間からまず

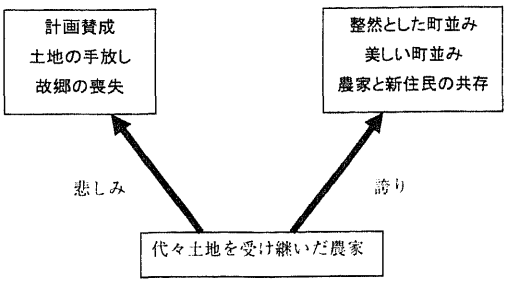


Fig. 1　事例2の言説空間

Table 5　事例2　第二の故郷（ふるさと）Kニュータウン

昭和四十二年，Kニュータウン開発の話がもち上がり，連日公民館でろん議がかわされました。この地で，先祖代々から受けつぎ，農業をしてきた人々にとっては，この計画に賛成することはとても勇気が必要だったのです。そのなかの一人，Oさんもそうでした。先祖から受け継いだ農家が田畑を手放すことは考えられないことでした。しかし，何回も話し合いを重ねるうちに，開発会社が入りみだれて『虫くい状態の町』になるよりも計画的な町作りの必要性を感じるようになりました。それには住民みんないっしょに移転することが必要でした。この住民全員の移転が整然とした美しいニュータウンができる大きな要因となったのです。

Oさんは，子どものころから慣れ親しんできた故郷が失われた悲しみが大きかったと言っています。区画整理事業によって，移転しなければならなかった人たちの気持ちを考えると，つらいものです。しかし，Oさんは，町づくりが始まると，ニュータウンの造成に積極的に協力しました。Oさんには，たとえ故郷が地下十メートルにうまってしまっても，この新しく生まれ変わった町は，先祖代々土地を守ってきた人たちの大きな決断の結果なのだ，という誇りがありました。そして計画的にできあがった公園や遊歩道を歩くとき，この故郷に住んでいた人たちの努力の上に今があるのだ，と思うと感がい深いものがあるそうです。今は，Kニュータウンができて良かったという気持ちでいっぱいだそうです。そして，個々に住む人たちみんなが，第二の故郷をつくっていかなければならないと思うようになったのです。

Table 6　事例2の言説素

| | データ | 言説素 | 対立項 |
|---|---|---|---|
| 1 | 虫くい状態の町 | 虫食い状態の開発 | 整然と美しい町 |
| 2 | 計画的な町作りの必要性 | 計画への賛成 | 計画への反対 |
| 3 | 住民全員の移転 | 住民全員の移転 | 移転不全 |
| 4 | 先祖代々土地を守ってきた人たち | 代々土地を受け継いだ人々 | 新しく移り住んだ人びと |
| 5 | 田畑を手放す | 土地を手放す | 土地を守る |

Table 7　事例3「『心のノート』作成の経緯」

はじめに

現在，日本の小・中学校では『心のノート』が児童・生徒に配布され，子どもが道徳の問題を考えるうえにおいてのヒントを与えたり，子どもが家族，教師などとともに考えたりするための資料として用いられている。

「道徳教育」というと，それだけでは拒否感を抱く人もいる。かつても私もそのような点があったが，後に示すような日本の現状を考え，何らかの方法によって，道徳や倫理について考え，言語化していく必要を感じるようになり，『心のノート』作成のために協力することにした。

『心のノート』に対する反発や反対の意見は，これまでもあちこちに発表されている。それらの中には，ためにするような議論で私に対する個人攻撃とさえ感じられるようなものもあったが，事実の歪曲も多く反論する気持ちにもならなかった。ただ，今回は，このような原稿を書くようにと依頼を受けたので，『心のノート』についての自分の考えを書かせていただくことにした。

読み取れる点としては，まず【道徳教育への拒否感を抱く人】・【心のノートへの反撥・反対意見】という言説素と，【道徳教育への肯定感を抱く人】・【心のノートの肯定・評価】という対立項の対立関係があり，このテクストはこの対立関係を軸に展開されていることがわかる。テクストの冒頭では，まず現在日本の小・中学校で心のノートが効果的に用いられているという，心のノートの有効性が明示されている。これにより，心のノートに否定的な立場の人々が心のノートの非有効性を主張するのは，教育現場の実際を無視した不当な評価であることが強調されている。また抽出された言説素より，道徳教育

Table 8　「『心のノート』作成の経緯」から抽出された言説素と対立項

| | データ | 言説素 | 対立項 |
|---|---|---|---|
| 1 | 『心のノート』が道徳の授業の資料として用いられる | 心のノートの有効性 | 心のノートの非有効性 |
| 2 | 道徳教育への拒否感を抱く人 | 道徳教育への拒否感を抱く人 | 道徳教育への肯定感を抱く人 |
| 3 | 日本の現状を考え | 日本の現状の考慮 | 日本の現状を考慮せず |
| 4 | 道徳や倫理について考え，言語化していく必要 | 道徳の言語化の必要性 | 道徳の言語化の必要性無し |
| 5 | 『心のノート』に対する反撥や反対の意見 | 心のノートへの反撥・反対意見 | 心のノートの肯定・評価 |
| 6 | ためにするような議論，個人攻撃，事実の歪曲 | 心のノートに対する不当な評価 | 心のノートに対する正当な評価 |
| 7 | 反論する気持ちにもならなかった | 反論の忌避 | 反論の実行 |

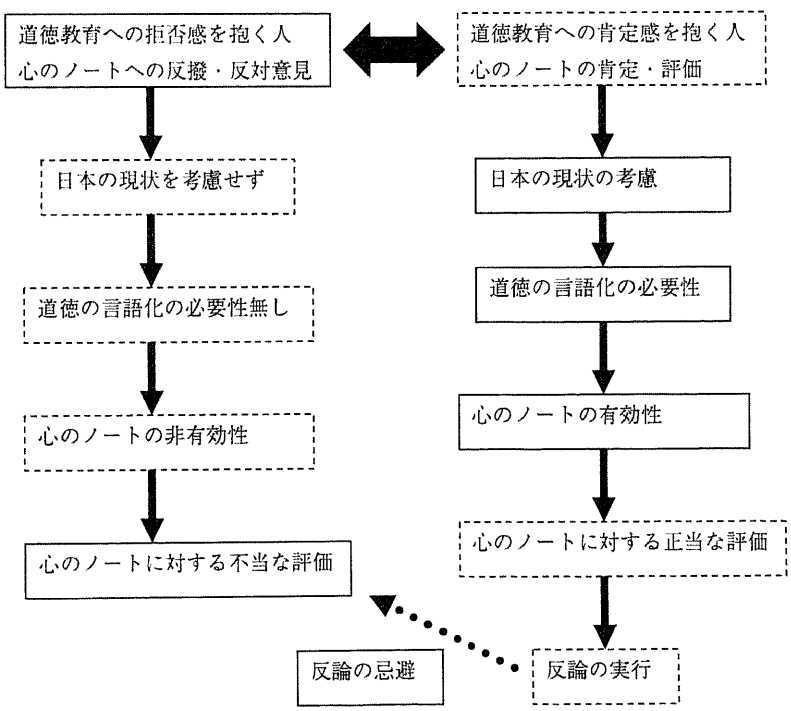


Fig. 2　事例3の言説空間

における心のノートの使用を肯定する立場は，日本の現状を考慮したうえで，それに対処するためには道徳の言語化が必要であり，そのための具体的なツールとして心のノートの必要性を述べている立場であると構造化されている事を読み取ることができるが，これとは逆にその対立項からは，心のノートに否定的な立場は，日本の現状を考慮せず，かつ具体的な対処法を示さない立場とされている事を読み取る事が出来る。

## 評価と考察

本研究ではGeeおよびLemkeの言説分析を取り上げ，両者のアイデアを生かしつつ，他の分析者も容易に利用可能な手続きを開発するためにテクスト言説分析を提案した。まずGeeによる言説分析においては，手続き化の困難という問題があったが，テクスト言説分析では言説素という分析単位を提唱し，このような言説素の対立項として，テクストの意味内容を整理したという点において，方法論の手続き化に向けて一定の意味を持つと言える。次にLemkeによる言説分析では，言説同士の関係性が読み取りづらいという困難が指摘され，その克服のためにテクスト言説分析では言説素の配置と分布を特定することで言説空間を再現した。しかし，同時に，手法をさらに洗練する必要がある。特に，再現化の手続化の面を洗練させる必要がある。たとえば何を言説素として抽出するかについては，他の抽出の候補も考えることができるため，経験的な意味での客観性の確保のためには，複数の評定者による一致を見る等の工夫も必要となる。この他，言説素同士の配置についても，洗練する必要がある。またテクスト言説分析の有効性の確認は今後の方法論の一般化のための課題である。

最後にテクスト言説分析全体の今後の課題としては，言説と「ことばのジャンル（バフチン，1988）」の関係を明らかにすることがあげられるだろう。ことばのジャンルとは，ある場面に典型的な発話の形式のことである（バフチン，1988）。このような特定の社会集団や状況の利用される定型的な言説素の配置であることばのジャンルが，テクスト言説分析によって，特定可能なのか，あるいは他のジャンル論に比べて，抽出の精度が良いかどうかについて，今後検討していきたい。

## 引用文献


ABREU, G. DE. (1995). Understanding how children experience the relationship between home and school mathematics. *Mind, Culture and Activity,* 2 (2), 119-142.

秋田喜代美（1997）.『読書の発達過程：読書に関わる認知的要因・社会的要因の心理学的検討』風間書房

バフチン，M.（著）新谷敬三郎・佐々木寛・伊東一郎（訳）（1988）.『ことば対話テキスト（ミハイル・バフチン著作集８）』新時代社

DANIELS, H. (2006).『ヴィゴツキーと教育学』（山住勝広・比留間太白，訳）. 関西大学出版部.（Daniels, H. (2001). Vygotsky and pedagogy. London: Routledge.）

フーコー，M.（著）中村雄二郎（訳）（1981）.『知の考古学』河出書房新社.

フーコー，M.（著）中山　元（訳）(2002).『心理とディスクール：パレーシア講義』筑摩書房.

フーコー，M.（著）小林康夫・石田英敬・松浦寿輝（訳）(2006).『フーコーコレクション３　言説・表象』ちくま学芸文庫.

福島　章・高橋正雄（編）(2000).『病跡学（臨床精神医学講座：Ｓ８）』中山書店.

GEE, J.P. (1990). *Social linguistics and literacies: Ideology in discourse.* London: The Falmer Press.

GEE, J.P. (1999). *An Introduction to Discourse Analysis Theory and Method.* London: Routledge.

御領　謙（1987）.『読むということ』東京大学出版会

川喜田二郎（1967）.『発想法－創造性開発のために』中公新書

小嶋秀夫（2001）.『心の育ちと文化』有斐閣

浜田寿美男（2001）.『自白の心理学』岩波書店

生田久美子（1986）.『「わざ」から知る』東京大学出版会

木下康仁（2003）.『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

LEMKE, J.L. (1995). *Textual Politics: Discourse and Social Dynamics.* London: Taylor & Francis.

無藤　隆（1986）. 文化的学習理論を目指して－前読み書き能力の獲得『児童心理学の進歩1986年版』金子書房

茂呂雄二（1981）. 日本語文章の形式的表示（1）—命題翻訳を中心に—. 読書科学, 25(2), 70-78.

茂呂雄二（編著）(1997).『対話と知：談話の認知科学入門』新曜社

日本心理学会（2006）.『心理学ワールド 32号』日

本心理学会
佐伯　胖（2001）.『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—』　東京大学出版会
酒井直樹（1996）.『死産される日本語・日本人』　新曜社
酒井直樹（2002）.『過去の声　十八世紀日本の言説における言語の地位』　以文社
TAPPAN, M.B. (2006). Mediated moralities: Sociocultural approaches to moral development. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
當眞千賀子（1997）. 社会文化的，歴史的営みとしての談話. 茂呂雄二（編著）『対話と知　談話の認知科学入門』　新曜社　pp.151-174.
塚野弘明（2001）. 文化的実践としての実験場面の組織化. 上野直樹（編著）『状況のインターフェース』　金子書房　pp.58-83.
上野直樹（編著）(2001).『状況のインターフェース』　金子書房
ワーチ，J.V.（著）佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子（訳）(2002).『行為としての心』　北大路書房
やまだようこ（2000）. 人生を物語ることの意味. やまだようこ（編）『人生を物語る—生成のライフストーリー』　ミネルヴァ書房　pp.1-38

（受稿9月30日：受理11月19日）